「一番の敵は自分の中の弱気」　ラガルド IMF 専務理事

日本経済新聞　電子版，2014/9/20 掲載

日本で女性の社会参加を進めるようエールを送り続けるクリスティーヌ・ラガルド国際通貨基金（ＩＭＦ）専務理事（58）。その真意は？　12 日からの「女性が輝く社会に向けた国際シンポジウム」に参加したラガルド氏に話を聞いた。



クリスティーヌ・ラガルド　国際通貨基金(ＩＭＦ)専務理事

――女性の雇用拡大が日本の経済成長実現に不可欠だと繰り返し強調してきた。

「日本の経済成長には、アベノミクスで行われてきた金融政策と財政政策に加え、構造改革が欠かせない。構造改革の１つが、労働市場をより流動性、柔軟性、効率性の高い、そしてもっと女性を受け入れるものにすることだ」

「日本は経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）諸国の中で、韓国と並んで女性の労働参加、男女間の賃金格差ともに最後尾にいる。もっと多くの女性が労働市場に入り、賃金も平等に支払われることで、日本はより大きな成長を望める。中期的には１人あたり所得が４％上がることが見込まれ、非常にインパクトが大きい」

――日本の現状に、どのような見過ごせない問題があると見ているのか。

「まず、急速な人口高齢化と生産年齢人口の著しい減少は、日本の特徴的な状況だ。それなのに女性の労働参加が進んでいない」

「一方、日本の女性は高い教育を受け、すばらしく才能にあふれている。ＩＭＦでは、大卒などの学歴を持ちながら労働市場からドロップアウトしてしまうのは、政策や文化の問題、また企業側が女性たちを雇い続ける覚悟を欠いているためだと分析している。だからこそ日本の手助けがしたい」

――日本の女性を取り巻く状況は変わると思うか。

「状況は変わりつつあるという認識を持っている。女性の活用やダイバーシティ（人材の多様性）の理念、ワークライフバランスについては過去にもたくさんのリップサービスがあった。しかし今回は政府の後押しと経済的な緊急性、そして女性をいよいよ活用しなければいけないという社会的な共通認識がある」

「できれば（女性の昇進を阻む見えない障壁である）『ガラスの天井』についても変化していると思いたい」

ラガルド氏の歩み	
1956年	仏パリで生まれる
71	シンクロナイズドスイミングのフランス選手権で2位
	パリ第10大学（ナンテール大学）法学部卒業
81	エクス・アン・プロヴァンス政治学院で修士号取得
81～2005	ベーカー＆マッケンジー法律事務所に所属 1999年から所長を務める
05	貿易担当相として仏政界入り
07	経済財政相に就任し、G7初の女性財務大臣に  ロイター
11	女性として初の国際通貨基金（IMF）専務理事
趣味はスキューバダイビング 息子が2人いる	

――仕事と家庭の両立で苦労している日本女性が多いが、自身はどうだったか。

「私自身も非常に苦労した。パートナーがかなり協力的だったとしても、子育ての最終的な責任者は母親と考えられることが多く、責任ある母親と同時に立派な職業人であることは大変だ」

「だからこそ保育施設の充実や子育て政策、そして意識変革によって、女性が仕事での成功と家庭での義務、そして喜びの両方を得られるようにしなければならない」

――ＩＭＦで初めての女性専務理事、Ｇ７で初めての女性財務相など、男性社会で活躍してきた。どのようにすれば男性の中で世界的に活躍する女性リーダーになることができるのか。

「ユーモアのセンスが大切だ。自分自身をきちんと評価し、自信を持つこと。また男性を分け隔てせず、敵ではなく味方につけることだ」

――これまでで最も大きな困難は？　どう乗り越えたか。

「私自身、困難は常にあった。一番大きな敵は、自分の内側にある弱気だ。いつも小さな弱気がわく度に戦わなければならない」

「だからこそ、困難にあった時はいつも『歯を食いしばって笑顔を見せる』というモットーを持っている。いつも周囲の女性、そして時には男性から『大丈夫、できる』という励ましをもらい、自分自身の中に響くその声が私の力になってきた。そのような人たちがいたのは幸運だったかもしれない」

NIKKEI Copyright © 2014 Nikkei Inc. All rights reserved.